

日本の歴史 35

『江戸の読書会： 会読の思想史』

前田勉著（平凡社 平凡社選書 2012）

本書の請求記号 121.5||Mae

稲垣 宏行

江戸時代、何故、儒学（朱子学）が盛んに学ばれたのか。思想史学者の著者は、儒学が「聖人」を目指す学問だったことが答えの一つと見えています。それは儒学を究めれば誰でも「聖人」になれるという平等主義を内包していたのです。江戸時代は士農工商の身分制度で統制された時代で、そもそもこの概念は儒学から生まれたものです。それが対極の意味を秘めていたことは皮肉と言えます。

江戸時代の学習形式は、古典の原文を繰り返し読んで暗記する素読、書物の内容や語句の意味などを説明する講釈、そして数人が集まって同じ書物を読み、その内容や意味を研究し討論し合う会読の3つに分けられます。本書は会読に重点を置いて学習形式の変遷を論じています。

会読の場は討論を交えるため、それに勝つ者と負ける者が現れます。それは身分ではなく学力で勝敗が決まる。すなわち実力さえあれば、どんな出自の者でも勝利できる平等主義の場であったことを意味していますが、現実には身分制度が厳然として存在しており、学問のみで立身出世は望めませんでした。本書が取りあげる福沢諭吉の父親も優れた学識の持ち主でありながら、中津（現・大分県）の下級武士だったため、うだつが上がらなかったと言います。しかし著者は、それゆえに江戸期の会読が成熟していったと考えています。会読に臨んだ人々は経済的・社会的利益を期待していなかったのです。

会読は儒学だけでなく蘭学の書物の翻訳に対しても盛んに行われました。この時代、会読は一種の「遊び」と考えられていました。ここでの「遊び」とは、学問における未知の部分を探求し、答えを「発見」することに喜びを見出すことを指しています。それはパズルやクロスワードを解くのに似ていると著者は述べています。また、会読では利益が期待できないゆえに、自分とは異なる意見も受け入れる「虚心」の精神が育てられたことも著者は指摘しています。

会読の性質の一つとして、本書では「結社性」が挙げられています。江戸後期、会読は儒学や蘭学だけでなく、幕府に睨まれるため大っぴらには出来ないものの、政治問題も対象とされるようになり、「結社性」はこれと結びつきを強めていきました。そして幕末期、会読に熟達した一人の藩士が時代を揺るがす契機を作りました。その人物の名は吉田松陰。本書によれば、思想史家の藤田省三氏は自著『維新の精神』の中で「(明治)維新は何によって維新たりえたのだろうか」という問いに対し、「一人一人が議論し、行動し、横に繋がった時に、維新が起こった」と答えたと言います。そして藤田氏はその源流が吉田松陰にあったと見ていたのです。

ところが、明治維新を興す契機となった会読は、皮肉にもそれが元で自らの存在意義を失っていくことになりました。江戸時代、学問は自分自身で学んでいくことに重きが置かれていました。教授法は余り重視されていなかったのです。それが明治になって欧米文化が積極的に取り入れられたことで逆に重視され、授業形式も江戸期にあった素読や講釈のようなものが主になり、会読の影は薄くなっていったのです。身分制度の撤廃によって学問が利害の伴うもの変わったことも、会読の本来の意義がなおざりにされる要因の一つとなりました。

江戸時代は明治時代と比べ閉鎖的な社会でした。しかし、だからこそ会読という学習形式が生まれました。物事には光と影の部分があります。悪い部分が目立つものからでも良いものが生まれるように、良いものにも欠陥はあります。本書は教育の有り様は勿論、物事に対する見方についても考えさせられます。会読という言葉は現在、馴染みの薄いものですが、それでも時代を超えた素晴らしい性質を持つもので現代でも参考に出来る学習形式だと思います。

いながき ひろゆき（司書・情報サービス課）